

月見月理解の

つきみづきりかいの

探偵殺人

たんでいさつじん

殺人鬼のいない夏

・二日目

◆幕間 一八月二十八日の夜―◆

「お兄さん。お風呂空きましたよ？」

コンコン、という小さなノックの後、相部屋のドアが開かれる。

聞き慣れた声に僕が顔を上げると、そこにはパジャマ姿の交喙が立っていた。

湯上がりのせいとか、その白い肌には、うっすらと朱が差して艶めかしい。

「あ、うん……。じゃあ、行ってくるよ」

ちなみに合宿所の風呂は男女共用なので、まずは女性陣が先に入り、今回のメンバーで唯一の男である僕が、最後に入浴するという形になっていた。

僕は着替えてバスタオルを手に取ると、相部屋を出て風呂場へと向かう。

「……………」

脱衣所と浴槽のドアを念のためにノックし、間違いでも人が入っていないことを確認した後、僕は服を脱ぐことにした。

いくら見知ったメンバーとはいえ、女の子たちと同じ宿に泊まるのは、やっぱり緊張する。「それにしても……」

湯船に浸かり一息吐きながら、僕は交喙の提案してきた『罰ゲーム』について考えていた。僕と一晚、同じ部屋で過ごすという内容と、彼女が最後に耳打ちしてきたセリフ。

『大丈夫です、よ。わたしはお兄さんの二号でも、構いませんから』

いつも通り僕をからかおうとしているんだろうけど、色々な意味で気になってしまう。

……落ち着かない。

体を洗っている間も、いつ誰かが乱入してくるか警戒していたので、僕はあまりリラックasできないまま入浴を終えた。

*

「あ、遅かったじゃん、兄貴」

風呂から出て真っ直ぐ部屋に戻ると、そこにはパジャマ姿の交喙だけでなく、何故か遥香も一緒にいた。

相部屋で、しかも二段ベッドがひとつある以外はほぼ何もない部屋なので、大部屋から持ってきたらしい座布団ざぶとんを床に敷いて、ふたりはトランプをやっていた。

「……って、何してるんだよ遥香。宮越みやこしさんに勉強教わるんじゃないの？」

「いいじゃんか、ちよっとくらい遊びに来たってさー。どうせ寝るまで暇なんだし」

と、遥香は軽く反論しつつ、にやりと口元に笑みを作る。

「あ、それともお邪魔だった？ なんならもう帰るけど？ 私もそこまで野暮じゃないし」
「……。もうちょっとゆっくりしていけば？」

「あははは。よかったね交喙ちゃん！ このヘタレ具合だと、兄貴は探偵さんに手を出してないっばいよー？」

「……………」

と、無表情のままアイスキャンディーを舐めている交喙の肩を、遥香は楽しそうに叩いた。好き勝手言ってくれるなあ。と、僕は思うものの、確かにまだ寝るには早い時間帯なので、遥香がいてくれた方が、正直気が紛れていいかもしれない。

「ちよっと、お兄さんの分のアイスもありますので、取ってきます、ね」

「あ、気にしなくていいよ。それくらい自分で——」

交喙は立ち上がると、僕の制止も聞かずに、ゆっくりと部屋の外へ出て行ってしまった。

「もう、遥香が変なこと言うからだよ？」

てっきり交喙が困っていたのかと思いい、実の妹を少し叱ろうとすると、

「はあ……、ダメだこりゃ」

何故か呆れ顔で、そう返された。

「兄貴ってば、ほんと何も分かってないよね。交喙ちゃんはさ、兄貴と初めてふたりっきり

で夜を過ごすから、緊張してるんだよ。だからこうして、私が空気をほぐしに来たんだから」

「……………」

ひよっとしたら、そうかもしれない。と、不覚にも納得してしまった。

交喙は、一見冷静な振りをして僕をからかってくるけれど、今回はそれが行き過ぎてしまつて、動揺しているのかもしれない。

そんなことを考えながら、僕は散らばっていたランプを手元にまとめる。

「だから、兄貴が優しくリードしてあげないとダメだからね？ 年上の男としてさー」

「そっちの方向の話だったの!? いや！ 僕と交喙はそんな関係じゃないし——」

「はあ、ほんと兄貴ってば……」

と、ため息を吐いて遥香が頭を抱えた瞬間、交喙が部屋の扉を開けた。

「すみません。途中で京元部長に引き留められました、ので」

と、交喙がアイスではなく、缶ジュースを両手にひとつずつ持って入ってきた。話を聞くのと、どうやら京先輩にもらったらしい。

珍しく先輩として気を利かせてきた京先輩に疑問を抱きつつ、僕は受け取った缶ジュースのプルタブを開ける。

「それじゃ、私はそろそろお暇しよっかな」

「ええっ!？」

「あんまり遅いと、勉強する暇もなくなっちゃうし、宮越先輩も食堂で待ってるみたいだしさー。じゃ、頑張ってるね、交喙ちゃん」

それだけ言うと、あっさり遥香は部屋を出て行ってしまった。

「……………」

腕時計を確認すると、時間は十時半。以前聞いた感じでは、交喙も十二時手前くらいに就寝するらしいので、間が空いてしまった。

「えっと……、トランプでもやる？」

「はい」

沈黙を埋めるようにその声をかけると、意外にも交喙は乗ってきてくれた。

勝負がトランプなら、僕にもチャンスがある。これがオセロやチェスなどの運が絡まないゲームだと、交喙が強過ぎて勝負にならない。

遥香が残っていたトランプをやりながら、僕は交喙とジュースを飲む。

「そういえば、さっきのって何だったの？」

ジュースも完全に空になったところで、僕はそう尋ねてみる。

「何がでしょう、か？」

「いや、二号がどうとか——」

言いかけて、ふと失言だったことに気づく。

僕は、「冗談です」と、言ってくれるのを期待していたのだが——。

「ああ、そのことです、か」

「え……………」

僕の対面に座っていた交喙が、ゆっくりと僕の隣へ移動する。

少し頬を赤く染めて、熱っぽい吐息を漏らしながら、僕の寝間着の上から、お腹の辺りにそっと手を這わせた。

「ちよつ、ちよつと、交喙——!？」

さすがに何かおかしいと感じて、僕は焦りながらそう尋ねる。

「はい……………？　なんでしよう、か？」

とろんとした視線を彷徨わせているのを見て、僕はその異常に気づく。

「さっきから様子がおかしい——って、交喙が飲んでたこれ……、お酒じゃないの？」

僕が交喙に手渡された飲み物は普通のジュースだったが、交喙が飲んでいたのは、見た目がジュースに似たチューハイだったらしい。

おそらく、ジュースを渡してきた京先輩の巧妙な罠だろう。自分の飲み物だけ注意していた僕の迂闊さを呪ったとき——、

「妹です、よ」

「え……………」

「さっきのお話です。妹二号ですから、わたしは——」
 交喙は熱っぽい視線のままそう言つて、僕の服の上から腰回りにかけて、そっと手を這わせ続ける。

「お兄さんは、遥香ちゃんともう仲直りしてしまいましたから……。わたしはもう、お兄さんの妹の代わりにもなれない、ただの後輩になつてしまいました。でも——」

ああ、そうだったのか。

交喙は、遥香との仲が戻るまで、僕に『自分を妹の代わりだと思つて欲しい』と言つていった。

でも、僕と遥香が仲直りしてしまつて、自分は何も必要ないのだと、交喙はそう思つてしまつていたのかもしれない。

今は、僕が家に帰れば理解と遥香がいる。

そんな状況の変化の中、いつもと変わらない表情で僕を支えようとしてくれていたこの子は、寂しい思いをしていたのかもしれない。

「——でも、お兄さんがもうひとり妹が欲しいと望むのなら、わたしは、いつでも妹二号になる覚悟ですから、遠慮無くおつしやつてください、ね？」

「……つて、ちよつと待つてよ!? なんで僕が妹マニアみたいに言われているのさ!? 妹の存在にそんな固執してないから!」

「違うのです、か?」

「全然違うよ!? 僕が遥香にこだわつたのは、あくまで家族だからで、それ以上の意味は——つて、それよりさつきから何してるの、交喙?」

いつの間にか、交喙が僕のズボンのポケットにまで手を入れてきていたので、さすがにやめてほしかった。

不快というわけじゃなく、彼女の滑らかで細い指の感触は、むしろその逆だったのだけど、酔っている交喙はともかく、素面の僕まで変な気分になりそうだ。

「いえ、理解が全く乱入してこないのが、ちよつと不自然だと思ひまし、て」
 「……………」

三ヶ月ほど前、理解が僕のところに来たときは、盗聴器の類は一切持つていなかった。だけど、今回水無月さんがやつてきたということだけは——。

「というわけで、予想が当たりました、ね」

交喙の手が僕のポケットから引き抜かれると、そこには碁石ほどの大きさの——おそらく盗聴器が握られていた。

「なんか大人しくしてると思つたらこれか……」

理解は僕が風呂場にいる最中に、脱衣所で着替えにこれを仕込んだのだろう。相変わらず油断も隙もない。

そして、こんなときでも冷静な交喙は、相変わらず頼りになる子だった。
 「では、お兄さんを守るわたしの役目は終わりましたので、おやすみなさい」
 それだけ言うとお酒のせいで起きてるのが限界だったのか、ゆっくりと交喙は二段ベッドの下端に潜り込む。

「……あのさ、交喙。僕は君を遥香の代わりなんて、思ったことはないよ?」

自分が『妹の代わり』だと言っていた少女に、僕がそう告げると、

「知ってます、よ」

交喙から、静かな口調で返ってくる。

「それに、わたしはお兄さんの一番になりたいんですから、そこは譲りません、よ?」
 が二号ならまだ認めます、が」
 理解

それだけ言うとお喙は目を閉じて、安らかな寝息を立て始める。

「……お休み、交喙」

僕は盗聴器をクローゼットに放り込んだ後、上段のベッドに横たわり、電気を消す。

ようやく、一日目の夜が更けていった。

◆八月二十九日◆

そして、二日目の午後二時過ぎ。

さんさんと太陽が降り注ぐプールサイドに、僕たちは集まっていた。

「ふう、いい天気だな。やはりこんな暑い日にじっとしているのはもったいない」

京先輩を始めとする放送部員+aのメンバーは、既に学校指定の水着に着替えている。

その中で異彩を放っているのが、黒ビキニを着た理解と、相変わらずのメイド服で佇んでいる水無月さんの存在だ。

「残念ですが、私は水着を用意しておりませんので」

と、侍女姿のまま穏やかな笑顔で言っている水無月さんに対して、僕はもはや突っ込む気すら起きなかった。

「というわけで、二日目の勝負は『水泳』だからな。各ベアとも、一時間後の本番まで、存分に練習するがよい」

学校のプールを貸し切りにして部外者を連れ込むという、バレたらやはり色々問題になりそうな話だったが、京先輩は水泳部の顧問にも話をつけておいたらしいので、強引に納得

しておくことにした。

ちなみに、くじ引きで決まった本日のペアは、僕と遥香、理解と交喙、そして宮越さんと京先輩といった構成だ。

「ところで兄貴って、水泳できたっけ？」

「僕はまあ、普通かな……」

勝負の内容が競泳ということなら、一時間程度の練習なんて意味がないと思うけど、準備運動としてならやる価値はある。

試しに遥香と二十五メートルを競って泳ぐと、僕の方が遅かった。

運動は人並みにできると思っていたのだけど、さすがに妹に負けるのはカッコ悪い。

「あーあ、昔は私より泳げたのね。若いんだから少しは外に出ないとダメだよ？　なんなら交喙ちゃんでも連れて今度出掛けてきたら？」

「……考えておくよ」

「それとも、私が泳ぎ方教えてあげよっか？　お兄ちゃん」

にやりと笑みを浮かべてからかかってくる遥香を見て、僕はなんともやりにくい気分になる。早くこの勝負終わって欲しくないかな……。

そんなことを思いながら、僕はプールの縁に座り、陽光を反射する水面に目を向ける。

遥香との因縁が片付いた一件以来、僕たち兄妹は、少しずつ以前の関係に戻ろうとして

いたが、やっぱり昔とは何となく違う気がする。

それは、僕と遥香が歳を取ったということもあるし、僕が何年もの間、遥香に嘘をつき続けてきたせいかもしれない。

とはいえ、今こうして何のしがらみもなく兄妹として話をしているだけで、僕としては信じられないほど幸運なことなだけだ。

「ふーん。私に教えられるのが嫌なら、交喙ちゃんに泳ぎでも教えてあげたら？」

と、プールから上がって僕の隣に腰掛けてきた遥香が、水中でもがいている理解と交喙のペアを指さした。

僕は、理解と交喙が運動しているところを見たことはないけど、理解は少し前まで歩けなかったし、交喙もあんまりスポーツで活躍しそうなイメージはない。

そもそも、今練習しているふたりはビート板を使ってるレベルだから、まず間違いなく『ほんとと泳げない』レベルだと思う。なら、僕程度でも多少は力になれるかもしれない。

「私は探偵さんの方で我慢してあげるよ。ま、ちょっとの間だけだね」

そう言って再びプールに飛び込むと、遥香は理解たちの方に泳いで行ってしまふ。

仕方なく、僕も交喙の練習を手伝いに、水の中に入ることにした。

「僕で良ければだけど、練習手伝おうか？」

と、僕が声をかけると、交喙はいつものように小さく頷いた。

「すみません、よろしくお願いします」

僕も大して泳げるわけじゃないけど、一応できる限りの協力はしようと思う。

「えっと、得意な泳ぎは何かある？」

「ビート板を使う泳ぎなら何でも大丈夫です、よ？」

「いや、それ自動的に一択だから!? ビート板を使った泳ぎとか何種類もないから!」

まあ、もしかしたらこの広い世界では、ビート板を使った特別な泳法というものもあるのかもしれないが、少なくとも学校競泳のレベルでは、僕は聞いたことがない。

「じゃあ、とりあえずバタ足の練習でもしようか……?」

「お願いします」

気休め程度にしかならないと思うけど、やらないよりはマシだろう。といっても、練習の内容自体は単純なものだ。

あまり水を跳ねさせずに、綺麗に足を細かく動かすだけ。

僕が交喙にそんな指導をしていると、

「ねえ、兄貴ってば! ちょっと何とかしてよー!」

隣のコースにいた遥香が、慌ててこちらにやってきた。

どうやら理解が面倒くさがって、まともに泳ごうとしならしい。

「というわけでごめんね。私が交喙ちゃん教えるからさー!」

そう言って、交喙の手を取ると、そそくさと別のコースに行ってしまった。

「……あんまり遥香を困らせないでよ、理解」

僕は呆れながら、プールのど真ん中で溺れかかっていた理解を引き上げる。当然ながら、今まで泳ぎというものを体験したことがないらしい理解は、ビート板が無ければ水中で立っているのが限界だ。

どう控えめに見ても、泳ぎで対決などできるレベルじゃないだろう。

「この勝負で、無理に勝ちを狙う必要なんてないけどさ、真面目にやらないと怪我するからね?」

「ふーん。ってことはあれか? やっぱ君は、初日の勝負は手を抜いてたつーことか? 毎回おいしいところをかつ攫っていく君とは思えねー言葉だな、れーくん」

僕の腕にしがみついたまま、理解が、不敵な笑みを浮かべてそう告げてくる。

「……………。そんなことないよ、僕は、ただ——」

恐ろしいことに、理解の読みは当たっていた。

だけど、自分ではうまく誤魔化していたはずのことをあつさりで見破られていたことに、内心で驚愕する。

やはり《無数に扉のある高座》が使えなくなったといえど、理解の洞察力は恐るべきものがある。

「君は自分が他人を利用して勝つことに躊躇^{ためら}いを覚えていたのさ。ゲーム上だけでならいざ知らず、あの『ナグルファル』では、実際に人を利用して勝利を得ることに後ろめたさを感じていた。だから——、せめて生き死にの勝負じゃない。誰も痛まない戦いでは勝利を譲ろうと、そんな小賢^{りかい}しいことを考えていたんじゃないのかな？」

「……違^{ちが}うよ、理解^{りかい}」

僕はそう答えつつ、水面に浮かんでいたビート板をつかんで、理解に手渡した。他の皆に聞かれないよう、理解に練習させながら、小声で話す。

「僕はそんな殊勝な人間じゃないよ。そんなこと、別に思っていない。ただ——いつも通り、自分のことを考えて立ち回ってるだけさ」

「ふうん、じゃあ君は、自分が負けても痛まない勝負なら、平気で他人に勝ちを譲るわけだ。いいだろう。この勝負で君の化けの皮を剥^はがしてやるさ」

と、僕の手につかまりバタ足の練習をしながら、理解が宣戦布告をしてくる。

バシャバシャと必死で足を動かしてる中で言われても、さすがに格好は付かないけれど。

「まあ、とりあえず溺^なれないようにね……。それより——」

「ん？」

理解にあることを尋ねようとして、僕は思い留まる。

視界に入ったのは、プールサイドから理解を見守っている水無月^{みなづき}さんの姿だ。

僕が昨晩の時点で気になっていた『奇妙な違和感』。

それを口にして躊躇^{ためら}ったとき、

「よし、時間だ！ そろそろ勝負を始めるぞ！」

京先輩のかけ声で、僕たちはプールサイドに上がり集合する。

「では、とりあえずリレー形式の競泳ということにして、先に二十五メートルずつ泳ぎ切ったペアが勝利する、という勝負で行こうと思うが——」

「それについてですが、私からひとつご提案をさせていただいてもよろしいでしょうか？」

意外なことに手を挙げて口を出してきたのは、今までプールの監視員をしていた水無月さんだった。

「放送部員の進言は基本的に却下する私だが、あなたには食事を作ってもらっている恩義がある。一応聞こう」

「それを言ったら、京先輩はもう生徒ですらないと思うんですが……」

僕の突っ込みはスルーされ、「ありがとございます」と、水無月さんは笑顔で続ける。

「ええと、今は競泳で勝負を付けるという設定になっていますが、『水中競歩』に変更してはいかがでしょうか？」

「水中競歩？」

「はい。泳がずに、歩くんです。その方が皆さん、対等の勝負ができると思ひまして」

詳しく話を聞くと、競泳では持ち前の経験とペアの實力だけで勝負が決まってしまう、泳げない者や、そもそも数ヶ月前まで歩けなかった理解は、相当不利になる。

だが、水中を歩く競争にすれば、かなりレベルの近い勝負になる、という説明だった。

「でも、それを言うなら昨日の料理勝負だって同じじゃないかしら？ 組み合わせの運も要素の一部なんだから——」

と、既にアドバンテージを得ている宮越さんが難色を示す。

京先輩はかなり運動神経がいいし、宮越さんも水泳は得意だそうなのだ。

だが、水無月さんは顔色ひとつ変えずに笑みを返し、

「はい。ですからこの変更でよろしいか、多数決で決めましょう。変更でよろしい人は手を挙げてください」

すると、当然のようにまず挙手したのは、ルール変更で得をする理解と交喙、次に、そもそも勝負事にはこだわっていない遥香と僕。そして、意外なことに京先輩までが手を挙げた。

「え、ちょ、ちよっと!? いいんですかそれで!？」

ペアの片割れである京先輩まで不利な戦いに望むと思わなかったのか、宮越さんは焦ったが、

「何、この程度のハンデで私は負けんよ。勝負が見えているのもつまらんからな」との一言で一蹴され、ゲームの内容は変更が決まってしまった。

「それでは私が審判を務めますので、皆さんは指定のコースに着いてください」

水無月さんの音頭で、まずは各ペアの片方がプールに入る。勝負のシステムは普通のリレー競泳と同じだ。

最初のスタートは、それぞれ、僕、宮越さん、理解が『歩く』ことになっていた。

ただ、理解だけは足が不自由なので、念のためビート板を手にしたが、水泳ならともかく、この水中競歩では単純に水の抵抗が増えるだけなので、誰も文句はつけなかった。

「では、スタート！」

開始の合図と同時に、タイミングのよかった理解が一步先を行く。

「っ……!？」

が、水中で歩き慣れていないせいかわ、理解がつんのめったようにバランスを崩す。

「理解、大丈——」

それに僕と宮越さんが気を取られたその一瞬、プールの水が顔にかけ、視界が塞がれた。

「きゃっ!？」

「うぶっ!？」

一瞬、何が起きたか分からず、目を拭いた直後、その正体に気づく。

「相変わらず汚い人です、ね」

二十五メートル先のプールサイドで、交喙が呆れたように言った。

見れば、水を浴びせられて立ち止まっている隙に、理解は僕たちより一、二メートル先足を進めていた。

要するに、溺れたフリをして僕たちの顔をこちらに向けさせ、その瞬間を狙って、手に溜めた水を勢いよく押し出し、僕たちを狙い撃ってきたのだ。

「やっぱり最低だわ！ このエセ探偵……！」

理解の罠に気づいた宮越さんが、お返しとばかりに水を掛けようとするが、届かない。

それでも諦めず、理解と同じように両手に水を溜め、水鉄砲のように発射すると、理解は持っていたビート板で、それをガードした。

「始めから反撃を防ぐつもりで、そんなものを……!?!」

僕もさすがに、そこまでは読めなかった。

水無月さんが競泳のルール変更をしたあの一連の流れを、初めから計算して狙っていたというならば、さすがは理解と言う他ない。

数メートル背後から、盾を持っている理解を攻撃してもほぼ無意味だ。怒りで我を忘れた分、結局はこちらの足が遅くなる仕組みになっている。

僕と宮越さんは仕方なく、着実に歩みを進めることにした。

「……………」

まあいいか、理解の言っていた通り、僕はそこまで勝ちに行くつもりはなかったし。

そう思っただけを動かすと、僕と宮越さんより三メートルほど進んだ位置で理解がゴールし、交際とバトンタッチする。

「正直なところ……わたしは卑怯な手で勝っても嬉しくないのです、が」

呆れたようにプールに入った交際に向けて、理解がにやりと笑みを浮かべる。

「くっくっく。お前が勝てばふたりでれーくんを一晚掛けて……できるんだぜ？ ちゃんと勝てよなー？」

「仕方ありません、ね」

「納得しちゃうの!? そこは否定してよ!? ってか、何を言われたのさ!?!」

無言でプールの中を歩き始めた交際を見て、僕は初めて焦りを感じた。

「はいはい。私も負けるのはやなんで頑張るから、兄貴は休んでてよ」

ようやくゴールした僕は、遥香とタッチして、プールから上がる。

「交際ちゃん！ 待ってよー」

どこか楽しげに水をかき分け始めた遥香を見守りながら、ようやく僕は一息吐いた。

*

しかし、前半に大幅リードした理解と交際のペアが勝つかと思いきや、何故か京先輩が

後半で巻き返し、僅差で勝利を収めるという結果に終わった。

交喙や遥香よりよほど抵抗がありそうな体つきなのに、正直不思議でならない。

「全く使えねー女だなお前は。俺様があんだけお膳立てしてやったのにあのザマかよ！」

「もともとあなたは卑怯な手で前進しただけでしょう?」

理解と交喙が睨み合う中、僕たちは無事二日目のゲームを終え、プールを後にした。

そして、休憩と夕食を終えると、再び静かな夜がやってきた。

*

明日の晩行われる最後の勝負は、『肝試し』らしいので、京先輩はこれから水無月さんと一緒に、校舎の特別棟へ色々仕掛けを用意しに行くようだった。

本当にこういうところだけ手間を惜しまないというか、その情熱の一片でも放送部のために割いてくれたらな、と僕は毎度のことながら思ってしまう。

しかし、色々なトラップや謎解きも仕掛けてある肝試しだそうなので、その辺りは、何気に僕も少し楽しみにしているのだが。

「というわけで、私は作業をしてくる予定だが、残る君たちも、その間に重要な任務をこなしてもらわねばならない」

と、何故かスコップを手にした京先輩に、僕たちメンバーが呼び止められる。

「何ですか?」

「忘れたのか? 罰ゲームの件だ」

「ああ……」

そういえば、今回は京先輩と宮越さんの勝利だった。

つまり、敗北した残る僕たち四人の誰かに対して、それぞれひとつずつ罰ゲームを課すことができるのだが――。

「初君、君には一時間後に行く花火を、近所のコンビニで買ってきてもらいたい」

「えっ!? それはちょっと……、あたしの予定が」

確かに、ただ買い物に行かせるだけというのは、罰ゲームとして拍子抜けのような気がした。

僕としては助かるのだけど、宮越さんも僕に何かさせようとしていたのか、納得がいかないらしい。

「む、君も初君に罰ゲームをさせたかったのか。よろしい、ならば君の予定を後回しにする代わりに、彼の女装を手伝ってもらおうか?」

「……はい!?」

一瞬、聞いてはいけない一言を聞いてしまった気がして、僕は叫んでしまう。「何を驚いたような顔をしているのかね初君？ ただ物を買に行かせるのが罰ゲームとか、まさか君も本気でそんなことがあり得ると思っていた訳ではあるまい？」

「いえ、ちよっと……さすがにそれは」

返事をしつつ、僕は軽く目眩を覚えてしまう。

「というわけで、皆は初君の着替えを手伝って女装させた後、買い物までの一部始終を撮影してきてくれ給え。私はこれから明日のゲームで使う仕掛けの準備に向かう」

「……さすがに冗談ですよね？ 本気でそんなことするわけないですよね？ てか、同じ学校の生徒に会ったらどうするんですか!？」

「はっはっは。今まで私がそんな冗談を言ったことがあったかね？」

「ごめんなさい！ ほんとそれだけは勘弁してください！」

ますい。

ちよっとこれは予定外過ぎる。

こんなはずじゃ無かったのに……！

「あまりしつこいようだと、女装させた上にエロ雑誌を買わせるオプションも付くがどうだ？」

「……い、いや、女装も何もそんな道具ないでしょう!？」

「安心しろ。私が女物の服からカツラまで一式用意してきた。それに、君以外のメンバーは全員女性だろう。足りなかったら何か貸してもらおうのだな」

「……………」

本気なのだろうか？ 京先輩の目を見る限り、確かに本気なのだろう。

正気ではないと思うけど、紛れもなく本気だ。

「では、皆の者よ、初君の罰ゲームについてはよろしく頼んだぞ。ではな」

それだけ言うと、京先輩はあつさり都合宿所から出て行った。

食堂に残ったのは、水無月さんと京先輩を除くメンバー全員だ。

「え、ええと……。ちよっと提案があるんだけどさ？ 僕は買いに行っただけど、うまく写真に撮れなかったことにして——」

僕は卑怯だと思いつつも、そんな感じで皆に誤魔化してもらおうとしたが——、

「兄貴ってヒゲも薄いし、そもそもあんま生えてないからいいっすねー。顔の下処理とかメイクが楽そうで」

「服は何を着せた方がいいかしら？ 都築君は元々細いから、ある程度薄い服を重ねた方が

それらしく見えると思うけど——」

「わたしはあまり服を知りませんので、アクセサリーと小物を選びます、ね」

「じゃあ、俺様は毛を剃る係をやってやるからな。さっさと風呂場に行くぞ、れーくん」

「……………」

全員ノリノリだった。

何言ってるの、この人たち……。

「……っっていうか、最後！ 何笑顔でカミソリ持ってるんだよっ!？」

目の前で展開された話し合いに、僕が冷や汗を流しながら震えていると、

「残念だけど、諦めた方がいいわよ都築君。どうせお店で証拠写真を撮らないとダメみたいだし……。というわけで、着替えなら手伝わわ」

どこか諦めと期待が入り交じった表情で、宮越さんがそう言ってくる。

確かに、京先輩が前言を撤回するとは思えないし、今のうちにやった方が僕のダメージは少ないかもしれない。

いや、けどそれぞれにしたって、やっぱりきつい。

「れーくん。下着が足りなかつたらいつでも貸してやるからな？」

「いらぬよ！ そこまで凝る必要ないでしょ!？」

ニヤニヤと笑みを向ける理解にそう怒鳴りつつ、僕は仕方なく用意された衣装に着替え始める。

ああもう、なんでこんなことになったんだろう。

「……っっていうか、何でみんな見てるんだよ!? もう僕のことなんかほっといってくれよ!？」

「泣きそうなお兄さんも可愛いです、ね」

正直なところ、本気で涙目だった。

そして、下処理と軽い化粧をされた後、僕はロングのカツラに、水色のキャミソール、淡い黄緑のカーデイガン、フレアスカートという格好でお店に向かい、地獄のような十数分を体験した。

しかも、撮影係として指名されてた宮越さんだけじゃなく、残ってた理解たちまで見学についてくるし、夕食後は宮越さんの罰ゲームでマッサージもさせられるし（女装のまま、女友達という設定で）、凄まじい目に遭った。

……死にたい。

その後、敷地内で軽く花火をやった後に皆で騒いで就寝、という流れになったが、僕の罰ゲームが雑談のネタの大半を占めたので、色々辛い時間だった。

*

「ああ、疲れた……」

バカ騒ぎが終わった夜中。畳の上に敷かれた布団の上で、僕は大きく体を伸ばす。今晩は僕がひとり、大部屋で寝るということになったので、誰も側にいないから気が楽だ。

さっさと明かりを消して寝てしまおうと思ったが、何故か寝付けなかった。

「……結局、聞きそびれちゃったな」

暗闇の中、僕はそう独りごちる。

気になっていたのは、理解の——いや、正確に言えば、理解と水無月さんのことだ。

月見月に関わらなくなった以上、水無月さんがプライベートとはいえ、過去、月見月のそんな情報を得ていた理解に接触するのは、少なくとも警戒されるころだろう。

そう、『月見月』側の立場としては、だ。

でも例えば、逆に月見月の方から、理解に何か用事があるのだとしたら——。

……考え過ぎだろうか？

だけど僕は、ずっとそのことが気になっている。

深夜二時過ぎ。

何となく眠れずに一階のトイレに向かうと、その帰り道で違和感を覚えた。

「……………」

数秒して、僕はその正体が、室内に籠もった熱気ということに気づく。

この暑さにもかかわらず、一階の窓が閉まっていたのだ。さっき見かけたときは確か、網戸の状態になっていたはずなのに、だ。

二階の個室は壁が薄いので、大声で話すと声が筒抜けになるという話は、京先輩から

聞いた。

なら——、もし重要な話をするとすれば、部屋の中ではしないんじゃないだろうか？

それは僕の妄想なのかもしれない。

でも、気がつけば僕は息を殺して、表口から合宿所の外へ出ていた。

月が出ているせいか、ギリギリで辺りは見通せる。

忍び足で合宿所を出ると、少し離れた木陰の側で、不意に声が聞こえてきた。

「で、例のボケ共は何だつて——？」

月明かりに照らされたふたつの影。

理解の問いに、水無月さんが穏やかな声で告げる。

「はい。理解、あなたが再び月見月の探偵としてこの依頼を——《ゾディアック》の占い師、『月見月因果』の搜索任務を、受ける気はあるのか？」と」

その言葉を聞いた瞬間、僕の心臓がどくと音を立てて、高鳴った気がした。